

經濟論叢

第七十六卷 第五號

レーニンのブルジョア革命理論(1)……………堀江英一…(1)

獨占體制と技術的革新……………降旗武彦…(16)

アメリカ特別償却史研究……………高寺貞男…(37)

蒙古民族の社會經濟史的一考察(2)……………伊藤幸一…(54)

[昭和三十年十一月]

京都大學經濟學會

レーニンのブルジョア革命理論(一)

——マルクス主義におけるブルジョア革命理論の發展(三)——

堀 江 英 一

はしがき

マルクスとエンゲルスはプロレタリア革命の最初の兆候——一八四八年パリの六月事件と一八七一年のパリ・コミューンを経験した。西ヨーロッパにおけるこうしたプロレタリア革命への足音のなかで、マルクスとエンゲルスはかれらの母國ドイツではブルジョア革命を遂行し指導しなければならなかつた。マルクスとエンゲルスのおかれたこうした歴史的条件のなから、さきに述べたようなマルクス主義のブルジョア革命理論がめばえたのである。レーニンはよりたかいさしせまつた歴史的条件のもとで、マルクスとエンゲルスとおなじ経験を經驗しなければならなかつた。レーニンは帝國主義というプロレタリア革命の時代に生活し、プロレタリア革命を成功にみちびいた。「レーニン主義は、帝國主義とプロレタリア革命の時代のマルクス主義である。もつと正確にいえば、レーニン主義は、一般的にはプロレタリア革命の理論と戦術であり、特殊的にはプロレタリアートの獨裁の理論と戦術である」(スターリン『レーニン主義の基礎について』——國民文庫版九頁)。レーニンはこの仕事を、十月革命とかれの著

書『國家と革命』(一九一七年八月九月執筆)・『プロレタリア革命と背教者カウツキー』(一九一八年十一月執筆)などのなかで、實踐的に理論的にやりとげた。だが、レーニンはそれにさきだつて、ロシアの強固な絶對王政ツァーリズムを打倒しなければならず、ブルジョア革命を遂行しなければならなかつた。レーニンはその仕事を一九〇五年の第一次ロシア革命・一九一七年の二月革命とかれの著書『民主主義革命における二つの戦術』(一九〇五年六月七月)・『一九〇五—七年のロシア第一次革命における社會民主黨の農業綱領』(一九〇七年十一月十二月執筆)とのなかで、實踐的にも理論的にも解決した。こうして、レーニンは「帝國主義とプロレタリア革命の時代」のなかで、マルクス—エンゲルスの學說を發展させ、いま述べたようにプロレタリア革命の理論をもブルジョア革命の理論をも、さらにブルジョア革命からプロレタリア革命への過渡期の理論をも(いわゆる四月テーゼを中心とする諸論文—たとえば『遠方からの手紙』・『現在の革命におけるプロレタリアートの任務について』・『わが革命におけるプロレタリアートの任務』など、とくにレーニン二卷選集社會書房版第七分冊におさめられている諸論文がこれにあたる)、完成した。レーニンはマルクス主義のブルジョア革命理論をあたらしい條件のもとで完成した。

レーニンの『あたらしい條件のもとで』のマルクス主義のブルジョア革命理論はどうした基本的特徴をもつてゐるであろうか? どういう點で、レーニンはマルクス—エンゲルスのブルジョア革命理論を發展させたのであろうか? レーニンは三つの點で、マルクス—エンゲルスを發展させた——

第一に、レーニンの時代はマルクス—エンゲルスとことなり帝國主義段階であり、強大なプロレタリアートと強固なプロレタリア黨をもつていた。こうした事情から、レーニンは、プロレタリアートをブルジョア革命の協力者の地位から指導者の地位にひきあげた。レーニンはプロレタリアート指導のブルジョア革命理論をはじめて確立し

た。

第二に、ブルジョア革命におけるプロレタリアートの指導の理論をマルクス—エンゲルスの「平民的—農民の立場」の理論に適用して、あの有名なブルジョア革命における労働獨裁論を確立した。

第三に、レーニンはこの労働獨裁論の發展として、永續革命—ブルジョア革命のプロレタリア革命への發展の理論を確立した。

しかもレーニンは、こうしたかれのブルジョア革命理論をその政治論—戰略戰術論と經濟學—客觀的法則の理論とのまつたき統一のうゑに確立したのである。かれはそのブルジョア革命の戰略戰術論をいつも客觀的法則そのものから基礎づけた。レーニンの切取地闘争論と市場理論、土地國有論と二つの道の理論はこうした關係におかれていた。レーニンにとっては、政治は經濟でありまた經濟は政治であつたし、經濟學のカテゴリーは同時に政治學のカテゴリーに轉化できるものでなければならなかつた。

わたしはレーニンのブルジョア革命理論をその發展をたどりながら簡単に紹介することにしよう。わたしはロシア語がでないし、レーニン全集の翻譯の現在の進行状態では多くのまちがいをしでかすかもしれないが、しかしこの仕事はするねらちのある仕事である。讀者諸兄とともにわたしのまちがいをただしてゆきたい。

一 ロシア第一革命前期

次節で述べるように、一九〇五—七年のロシア第一革命を指導しそれを整理した著書—一九〇五年の『民主主義革命における二つの戦術』と一九〇七年の『一九〇五—七年のロシア第一革命における社會民主黨の農業綱領』

は、レーニンのブルジョア革命理論の完成した姿をあらわしている。そこで、わたしは簡單を期するために、『ソ同盟共産黨小史』とソ同盟マルクス・エングルス・レーニン研究所編『レーニン傳』の敘述の順序にしたがわないで、第一革命期のレーニンのブルジョア革命理論を中心として説明しようとおもふ。そしてそれをあきらかにするために、まず第一革命前のレーニンのブルジョア革命理論の生成過程を説明する。

ところで、レーニンが活動をはじめ一八九三年から一九〇四年までのレーニンの實踐的・理論的活動をどうおさえるべきかということはかなりむづかしい問題である。『ソ同盟共産黨小史』は、共産黨の歴史という立場から、この時期を二つにわけている――

「第一章 ロシアにおける社會民主黨結成のための鬭争(一八八三―一九〇一年)」

レーニンのこの期間の活動の主要目標は、農奴制ロシアに根をはつていた農民的小ブルジョア社會主義ナロードニキを打破して、プロレタリア的マルクス主義にたつ大衆組織を確立することであつた。レーニンのナロードニキとの鬭争のなから、大別して二つの系統の著作がうまれてくる。第一の系統は『いわゆる市場問題について』(一八九三年)から『ロシアにおける資本主義の發展』(一八九九年)にいたる經濟的著作であり、第二の系統は『社會民主黨綱領の草案と説明』(一八九五年)・『ロシア社會民主主義者の任務』(一八九八年)・『わが黨の綱領草案』(一八九九年)などの社會民主黨の任務に關する政治的論文である。レーニンにとっては、この二つの系統は一つに統一されてきた――ナロードニキに對する經濟學的批判はそのまま社會民主黨の任務を規定するからである。わが國では、もつぱら第一系統の著作がよまれて、第二系統の著作が忘れられているが、これではいくらアカデミズムの追放がさげばれても、それは所詮無駄である。

「第二章 ロシア社會民主黨の結成。ボルシエヴィキおよびメンシエヴィキ二分派の黨内出現(一九〇一―一九〇四年)」

レーニンは、この時期のはじめ、一九〇三年のロシア社会民主労働黨第二回大會（事實上の創立大會）をめざして、ますます第二の系統の活動を強化していった。——『労働者黨と農民』（一九〇一年）・『ロシア社会民主黨の農業綱領』（一九〇二年）・『貧農に訴える』（一九〇三年）。だが、レーニンのこの時期の活動の注目すべき特徴は、マルクス主義内部に生まれた日和見主義——第二インターナショナルのロシア版である經濟主義者およびメンシエヴィキとの闘争を通じて、ボルシェヴィキ（共產黨）の黨理論を確立したことである。——『なにをなすべきか？』（一九〇二年）・『一步前進二歩後退』（一九〇四年）。このボルシェヴィキの黨理論の確立はマルクス主義の發展におけるレーニンの最大の功績であろう。レーニンのブルジョア革命理論も實はこのレーニンの黨理論にささえられているのであるが、しかしここではそれについてはかたらないことにしよう。

そこでわたしたちがこの時期のレーニンのブルジョア革命理論を理解しようとするれば

第一の系統——『いわゆる市場問題について』から『ロシアにおける資本主義の發展』にいたる經濟的著作
第二の系統——『社会民主黨綱領の草案と説明』・『ロシア社会民主主義者の任務』・『わが黨の綱領草案』・『労働者黨と農民』・『ロシア社会民主黨の農業綱領』・『貧農に訴える』などの綱領關係著作
この二系統の著作を統一的に研究しなければならぬ。わたしは第一系統から『ロシアにおける資本主義の發展』を、第二の系統から『ロシア社会民主黨の農業綱領』と『貧農に訴える』をとつて、それをブルジョア革命理論の視野から紹介することとする。

『ロシアにおける資本主義の發展』（一八九九年）

レーニンのこの書物は、さきに述べたように、一八九三年にはじまるレーニンのナロードニキ批判のいわば集大

成であつた。レーニンは、一九〇九年十二月十六日づけのスクヴォルツォフ―ステパーノフあての手紙のなかで、一八九九年のこの書物の第一版と一九〇七年七月執筆の「第二版の序文」とを、みずからみごとに特徴づけてゐる。

「イリオン(レーニン——編輯者)は(ロシアにおける資本主義の發展)のなかで——筆者)何を證明しようとし、また證明したか?ロシアにおける農業諸關係の發展は資本家的に進行していること、すなわち地主經濟においても農民經濟においても、『土地共有體』の外部においても内部においても、さうであること。これが一つ。さらに、發展はすでに争う餘地なく外ならぬ資本家的な道を、またとりもなおさず外ならぬ資本家的な階級編制を描示したということ。これが第二。この問題をめぐつて、ナロードニキとの論争が行われた。それは證明されねばならなかつた。それは證明されている。：一八八三—一八八五年および一八九五—一八九九年に終結的に且つ正しく解決されていた問題のほかに、二十世紀の歴史は我々に一つの第二の問題を提起した。そしてイリオンは、私の深く確信するところによれば、彼が自己の書の第二版への序文において、：それからは資本家的な農業的發展の二つの種類の可能性が生ずること、およびこれら二つの種類の間の歴史的鬭争はいまだ終りを告げていないことを指摘したとき、正しかつた。土地の國有化—舊土地所有の農民的破壊は、アメリカ的道の經濟的基礎である。六年十一月二日の法律—舊土地所有の地主的破壊は、プロシヤ的道の經濟的基礎である。我々の時代、一九〇五—一九〇九?年?は、これらの道の革命のおよび反革命的鬭争の時代である」(『ロシアにおける資本主義の發展』——岩波文庫版上巻の「ドイツ版への序」一五一—六頁)。

レーニンは、この書物の積極的側面と消極的側面とを、ここでみずからただしく評價している。この點を少しくわしく説明してみよう。

積極的側面

ナロードニキは、よく知られているように、資本主義は獨立生産者と共に農民を犠牲とし没落させ、したがつてみずからの國內市場をせばめつつ發展するものであるから、資本主義は外國市場をもたないかぎり發展しえないと説いた。ナロードニキはこの理論のうゑに農民社會主義をきずき、プロレタリアートの指導性を否定した。レーニンは、これに市場理論を對置して、「第一章ナロードニキ經濟學者の理論的誤り」、農民經濟も地主經濟もともに資本主義化し資本主義的階級編成の方向にすすんでいるのであつて全農民が貧窮化しているのではないこと、「第二章農民層の分解」と「第三章賦役經濟から資本主義經濟への地主の移行」、こうしてロシア農業における資本主義的發展は必然であり現に急速に進行しつゝあること、「第四章商業的農業の成長」、こうした農業資本主義的發展こそが本書の副題となつてゐる「大工業のための國內市場の形成過程」なのである。

註 わが國のいわゆる講座派理論はマルクスの再生産理論に立脚し、レーニンの市場理論とはなんのかわりもなかつた。わが國のマルクス主義は、終戦にいたるまで、レーニンの市場理論をただしくうけいれるまでに發展していなかつたのである。

だから、講座派理論は、日本農業における資本主義の發展——その指標としての中農層の富農と貧農への分化を頑強に否定しつづけてきた。最近になつて漸くこれがうけいられるようになってきたが、それは毛澤東の農村階級區分論から輸入されたようにおもえる。

しかしこうしたやりかたは講座派理論の缺陷をごまかすだけである。資本主義がどのように日本經濟をとらえて發展するかを説明する理論は、すでに成立した資本の蓄積を説明する再生産理論でなく、レーニンの市場理論でなければならぬ。さらに、市場理論は封建的生産様式の資本主義的生産様式への移行を説明するが、再生産理論は兩者の相異をあきらかにするにすぎない。わたしたちは、いま一度、再生産理論と市場理論との關聯の問題にたちかえらねばならぬ。

レーニンはこうして「大工業のための國內市場の形成過程」をあきらかにすることによつて、大工業の發展とそ

れにともなうプロレタリアートの成長を實證した。「プロレタリアートの指導的役割はまつたくはつきりした。歴史のうごきにおけるプロレタリアートの力が、人口全體のなかにしめるその割合とくらべてはかりしれないほど大きなことであることもまた、はつきりした。この二つの現象の經濟的基礎は、この著作のなかに證明されている」(『ロシアにおける資本主義の發展』の「二版の序文」——レーニン全集第三卷九頁)。レーニンはこうした實證を通じてナロードニキを完全に破砕してマルクス主義のただしさを證明したのである。

消極的側面

レーニンは、さきに引用した手紙の後半で、かれの『ロシアにおける資本主義の發展』が「資本家的な農業的發展の二つの種類」の「歴史的鬭争」、いわゆる二つの道の理論が説明していないことを、指摘している。レーニンは第一革命の經驗のなかからはじめてこの二つの道の理論をまなびとつたのである。「ロシアにおける資本主義の發展」のなかでは、農民層の分解とそのなかからの資本主義の發展(第二章)と地主の賦役經濟から資本主義經濟への移行(第三章)とが、まつたく平行的にのべられているだけであつて、兩者はたまたかうものとしてのべられていない。そればかりでなく、レーニンはわざわざぎのやうにことわつてゐる。「農村ブルジョアジーは現在の農村の主人公である、とわれわれはさきいつたが、そのばあい、分解をばんでゐるつぎの諸要因を、すなわち、債務奴隸制、高利貸業、雇役、その他を捨象した。實際には、現在の農村の本當の主人公は、しばしば、農村ブルジョアジーの代表者ではなくて農村の高利貸や近隣の地主のこともある。しかしこのような捨象は、まつたく當然の方法である。なぜなら、そうしなければ、農民のあいだでの經濟關係の内部的構造を研究することはできないからである」と(前掲書一七八頁)。

こうして、レーニンはわざと、農村における資本主義の發展をさまたげてゐる雇役・債務奴隷・高利貸などを捨象し、したがつてまた地主經濟も農民經濟も平行的に資本主義經濟へ移行するように、えがきた。このことはまつたくただししいし、またナロードニキを克服するためには必要であつた。しかしこのことは同時に、レーニンがのちにみずから批判して、「ロシア農業における資本主義的發展のていどに關する過重評價がこれをうみだしたのである。農奴制度の遺物は、當時のわれわれには、ささいな特殊性のようにおもわれ——分有地と地主所有地における資本主義的經營は、まつたく成熟し、強化された現象のようにおもわれた。革命はこのまちがいをあばいた」(一九〇五—七年のロシア第一革命における社會民主黨の農業綱領——朝野他譯九八頁、ソ同盟一九五四年英譯版一二九—三〇頁)と、いうにいたらしめたのである。

だが、レーニンはここで封建的土地所有の問題を理論的に捨象しただけであつて、現實に存在する封建的土地所有を否定したわけではない。かれは、一八九五年の『社會民主黨綱領の草案と説明』のなかで、この封建的土地所有とツァリズムとの撤廢の問題つまりブルジョア革命の問題にとりくみ、それは一九〇三年社會民主黨第二回大會の決定する綱領の草案となつた。

『ロシア社會民主黨の農業綱領』(一九〇二年)と『貧農に訴える』(一九〇三年)

レーニンは、さきに述べたように、はやく一八九五年の『社會民主黨綱領の草案と説明』いろいろ綱領問題に注目してきたが、第二回大會がちかづくともいよいよ大會に提出する綱領草案にとりかかつて(その討論内容はレーニン全集第六卷『ロシア社會民主黨綱領作成のための資料』のなかにおさまられている)、イスクラ編輯局で一致した確

定草案を解説したのが、ここに紹介する『ロシア社會民主黨の農業綱領』と『貧農に訴える』とである。この確定草案はそのまゝ一九〇三年七月八月の第二回大會(事實上の創立大會)で採擇されたので、この解説はそのまま採擇された綱領の解説として役立つのである。それらは農業綱領を中心としていながら綱領の全體にわたつてゐる。

わたしはこの綱領(その全文はレーニン全集第六卷に附けられている『研究のしおり』一〇—一五頁におさまられている)の順番にしたがつてレーニンの規定を紹介することしよう。

社會民主黨の終局任務

まず最初に、ロシア社會民主黨の終局目標『社會主義と終局任務』プロレタリア革命とその條件『プロレタリアートの獨裁』がロシア資本主義の發展と矛盾から基礎づけられている。『ロシアにおける資本主義の發展』は一つにはこの基礎づけにささげられたのである。

社會民主黨の當面の任務

1 政治的任務 それはブルジョア革命である——

「ロシアでは、資本主義はすでに支配的な生産様式になつてゐるが、まだ地主、國家あるいは國家首長への勤務大衆の農奴的隷屬に基礎をおく、わが國の舊來の前資本主義的制度のきわめて多數の殘存物が保存されている。これらの殘存物は、經濟的進歩をきわめて強力に阻害しており、プロレタリアート階級闘争の全面的發展をゆるさず……全人民を無知と無權利とに引きとどめてゐる。」このすべての遺物のうちでもつとも有力な遺物であり、この野蠻全體のもつとも強力な壁であるのは、ツァーリ專制である。それは本性そのものからしていつさいの社會運動にたいして敵對的であり、プロレタリアートのいつさいの解放への志向の最惡の敵手となりざるをえない。

「だから、ロシア社會民主労働黨は、ツァーリ專制を打破し、つぎのことを保證する憲法をもつた民主的共和制によつてこれをおきかえることを、その當面の政治的任務として、かかげる」(前掲『研究のしおり』一二頁)。

レーニンは、プロレタリアートにとつてのブルジョア革命の必要を、「ロシアの社會民主主義者は、なによりもまず政治的自由をかちとらうとしている。そして、この自由が社會民主主義者に必要なのは、新しい、もつと良い、社會主義的な社會組織のための闘争にロシアのすべての労働者をひろく公然と團結させるためである」(『貧農に訴える』——國民文庫版一〇頁。なお五四頁をも参照)と、プロレタリアートがプロレタリア革命に必要とする團結の獲得から説明している。そしてプロレタリアートがみずからを解放するための前提條件であるブルジョア革命の基本目標を、レーニンは、第二インターナショナルのひとびとと異つて、ハッキリとツァーリズムの打倒と民主共和國の實現としぼつてゐる。レーニンはマルクス＝エンゲルスの教えをうらざらなかつた。

レーニンは、さきの『ロシアにおける資本主義の發展』のなかでは、農業における封建制度の殘存を指摘しながら、それが資本主義へ移行しつゝあり移行する必然性をもつことを強調し、それが移行をさまたげる側面を捨象したが、ここでは「農奴制的隸屬に基礎をおく……舊來の前資本主義的制度的きわめて多數の殘存物」で「經濟的進歩をきわめて強行に阻害して」ゐる側面を現實のままとらえ強調してゐる。

2. 労働者の要求 このなかには農業労働者の要求もふくまれている(『ロシア社會民主黨の農業綱領』——レーニン全集第六卷一〇二—三頁、『貧農に訴える』前掲書六二—三頁)。ロシア社會民主黨は労働者階級、それだけを代表する政黨であり、したがつてあらゆるかれらの要求を支持する。だが、いまはプロレタリアートの終局目標であるプロレタリア革命の段階でなくブルジョア革命の段階であり、したがつて労働者の要求は「社會改良的要求の範圍を出てはな

らない」し、「無條件に最小限綱領の枠内にとどまらねばならない」(『ロシア社会民主黨の農業綱領』一〇八頁)。綱領はこれをつぎのように述べている――

「(ブルジョア社会の枠内で――筆者)労働者階級を肉體のおよび精神的退化から保護するために、また解放闘争(プロレタリア革命――筆者)のための彼らの能力を發展させるために」(前掲『研究のしおり』一二三頁)。

プロレタリアートの最大限綱領は社会主義である。

3 農民の要求　ここで農民というのは、いうまでもなく、農業労働者をふくまない獨立生産農民のことである。まず農業綱領をかかげよう――

「農民をちよくせつ重壓している農奴制度の殘存物を除去することを目的として、また農村における階級闘争の自由な發展をはかるために、黨はまず第一につきぎの事を要求する。

一　土地買取賦拂金と年貢上納金の廢止、さらに人頭税負擔身分としての農民にげんざい課せられているあらゆる義務負擔の廢止。

二　農民各自が自分の土地を處分するのを拘束しているいつさいの法律の廢止。

三　買取賦拂金および年貢上納金の形で農民から取りたてられた金額の農民への返還。

四　つきぎの目的のための農民委員會の設置。(イ)農奴制の廢止のさいに農民から切り取られ、地主の手中にあつて農民を債務奴隸化する道具となつている土地を、村落共同團體に返還するため。;(ロ)カフカーズの農民が一時的義務負擔農民、ヒザンなどとして用益している土地を、彼らの所有にひきわたすために。(ハ)ウラル、アルタイ、四部邊區その他の國內諸地方にそのままのこつている農奴制度の殘存物を除去するため。

五　法外に高い小作料を引きさげ、債務奴隸制的性格をもつ契約を無効と宣告する權利を、裁判所にあたえること」(前掲『研

究のしおり」一四—五頁。

まず第一に、この農業綱領は「農民をちよくせつ重壓してゐる農奴制度の殘存物を除去することを目的として」
「——」農奴的地主の支配を打倒する社會革命」(『ロシア社會民主黨の農業綱領』一〇九頁)を要求してゐる。その
ためにはまた、ロシアの革命はブルジョア革命という性格をもつこととなるのである。ここからきわめて重要な結
論がでてくる——「農奴制にたいしては、また農奴的地主およびこの地主に奉仕する國家にたいしては、農民は
まだ依然として一階級であり、しかも資本主義社會の階級ではなく、農奴制社會の階級、すなわち身分的階級であ
る。そして農奴制社會に固有な、『農民』と特權地主とのこの階級對立がわが國の農村に存續してゐるぎり、その
かぎりにおいて労働者は、疑いもなく『農民』に味方しなければならず、農奴制のあらゆる殘存物にたいする彼ら
の鬭争を支持し、彼らを鬭争に押しやらねばならないのである」(『ロシア社會民主黨の農業綱領』一〇五頁。なお『貧農
に訴える』六七—八頁、『労働者黨と農民』——レーニン全集第四卷四六三—四頁)。こうして、レーニンは農奴制度の殘存
物の除去のためにはプロレタリアートは全農民の鬭争を支持しなければならないという。ブルジョア革命における
勞農同盟論の礎石はこうしておかれる。

ところで、ここでレーニンがその除去のためにたたかわねばならないとした「農奴制度の殘存物」は、ほとんど
まつたく、一八六一年の農奴解放のときの土地買取賦拂金・年貢上納金と切取地、つまりイギリス流にいえば「隷
農地」(Land in Villanage)に關したものに過ぎられ、しかも切取地全部の返還でなく「地主の手中にあつて農民
を債務奴隷化する道具となつてゐる土地」だけの返還にかざられ、地主が資本主義的に經營してゐる切取地の返還
を要求しておらない。まして本來の地主地(イギリスの Domest)の收奪を要求してゐないのである。この時期のレ

レーニンの要求は、のちの土地國有化論にくらべて、ひどくかぎられたものであり、また地主支配の完全打倒をめざしていなかつた(この要求が全部通つても、地主には廣大な地主地と一部切取地がある)。このいわゆる切取地返還闘争は「封建制度の殘存物」をもつばら切取地にかかわらせることによつて、さきに述べたレーニンの自己批判がしめすように、封建制度の過少評價と資本主義の過大評價を結果することとなつたが、こうしたことはいくぶんかは『ロシアにおける資本主義の發展』と關連している。

ここまでは社會民主黨の要求は農民の要求ともナロードニキの要求とも合致する。ナロードニキは農民のブルジョア革命的な要求を代表している。しかし當時のロシア農村にはもう一つの階級對立——農村労働者と農村企業家との對立がすすんでおり、社會民主黨はこのプロレタリアートを代表する政黨であり、このプロレタリアートをたすけて農村企業家にあたらねばならない。ここから第二の問題——ナロードニキなどと訣別しなければならぬ問題が生ずる。社會民主黨は、單に「農奴制度の殘存物の除去」を要求するばかりでなく、それを「農村における階級闘争(プロレタリアートとブルジョアジーとの闘争——筆者)の自由な發展をはかるために」要求するのである。ここから貧農團體と都市の労働者との同盟、プロレタリア革命における労働同盟論がうまれる。

ところで、この二つの矛盾と二つの闘争——農奴地主と全農民との闘争と農村企業家と農村労働者の闘争——のうち、當面のブルジョア革命では前者が後者に優先する。さきに引用した農業綱領では、農奴制度の殘存物の除去が具體的に要求されているだけで、農村企業家、資本主義を排除する項目は一つもかけられていない。それにもかかわらず、レーニンは「いまわれわれに必要なのは…金の權力に對抗する、資本の權力に對抗する團體、いろいろの共同團體に屬するすべての農村労働者と無産農民の團體、地主にたいしてだけでなく富農にたいしても同じよう

にたたかうための、貧農全體と都市の労働者との同盟である」(『貧農に訴える』三〇頁)といひ、また「地主のほうに心を引かれ、労働者に敵對して金持に味方するような富んだ農民は、ますますふえていく」(同上書二八頁)と述べている。レーニンはブルジョア革命の段階で、労働者と全農民との同盟でなく、労働者と貧農との同盟を、地主だけとたたかうのでなく、地主と富農との双方とたたかうことを主張しており、ブルジョア革命からプロレタリア革命の過渡期を規定する四月テーゼにちかひことを主張している。このように富農の反封建闘争力をかるくみて、労働者と貧農との同盟を主軸におく戦術規定は、切取地返還闘争論にみられたとひとしく、一本で地主とたたかえないほど農民が分化していること——封建制度のよわさと資本主義のつよさの是認を前提しているのである。

こうしたレーニンのブルジョア革命理論は、ロシア第一革命の指導と闘争との經驗を通じて、かなり大きく變化する。基礎理論でも戦術でも大きく變化したのである。